

生活者から見た上海一〇〇年の歴史

佐藤 量

一度でも上海に行ったことがある人ならば、外灘の景色を見たことがあるだろう。黄浦江をはさんで、浦東側には東方明珠塔や上海ヒルズをはじめとした現代的な超高層ビル群がそびえ、外灘側には和平飯店や上海海関など重厚な歴史的建造物が立ち並ぶ。歴史と現代のコントラストを一度に体験できる場所が外灘であり、これが上海の魅力である。

アメリカにおける建築・都市計画の指導的立場にあるドロレス・ハイデンは、都市の魅力はその土地に積み重ねられた「場所の力」(power of place)にあると述べた。場所の力とは、都市のランドスケープ(景観)に秘められた社会的な記憶であり、それはたとえば民族の歴史、労働者の歴史、女性の歴史など、その時

代にその土地を生きた人々の多様な歴史である。政治史や経済史のみならず、層層的に折り重なる人々の歴史を掘り起こして、都市が作られていく過程を明らかにし、同時に忘れ去られた場所を可視化することによってこそ、都市への理解は一層深まるのである。

本書のねらいは、現在アジア有数の国際都市として発展し続けている上海が、一〇〇年のあいだにどのように形成されていったのかを、上海を生きてきた生活者の目線から明らかにすることである。本書は平易な言葉で記述され、また貴重な写真も多数含まれているため、上海研究や歴史学の専門以外の人々にも十分に開かれたものとなっている。

本書の学術的意義は高い。上海史を政

岩間一弘・金野純・
朱珉・高綱博文編著
上海 都市生活の現代史



A5判 350頁
風響社 [1890円]

治・経済・文化的側面から描いた先行研究では、高橋孝助・古厩忠夫編『上海史——巨大都市の形成と人々の営み』(東方書店、一九九五)が嚆矢である。同書は租界の歴史を中心として、政治・経済・文化史に目を配りながら一〇〇年の歴史を概観しており、上海の歴史に興味を持つものにとって重要かつ必読文献として重宝されてきた。一方で、紙幅の関係からか一九四五年以降の記述が少なく、具体的な生活者の営みにはあまり力点が置かれていない。

それに対して本書は、上海一〇〇年の歴史を六つの時代にわけて章が構成され、各章は、①政治・経済に焦点を当

中国研究所 会員制度のご案内

当研究所は、中国およびアジア諸国との友好を願う立場から、現代中国の政治、経済、社会、文化、歴史を科学的に研究する民間研究機関として、1946年1月に創設されました。以来今日にいたるまで、出版物の編集発行、専門図書館の運営を活動の柱とし、日本における中国の調査・研究の拠点として歴史を重ねてきました。

中国研究者および広く中国に関心のある方々の参加と交流を目的とした個人向けの研究会員制度を設けております。当研究所の趣旨をご理解の上、入会をご検討いただけますよう、何卒よろしく願い申し上げます。

60年以上の歴史を有する研究所として、会員の皆様により充実したサービスを提供できるよう努力してまいります。

【研究会員】

会費：9,600円(1年間)

学生会員：5,000円(1年間)

【会員特典】

- ・当研究所発行の学術月刊誌『中国研究月報』の無料配布
 - ・当研究所主催の公開講座等の参加料割引
- 詳細はお問い合わせください。

一般 社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp/>

てた概説、②その時代を象徴する人々から見た都市生活、③上海と日本の関係、というテーマ設定で記述されている点が特徴的である。さらには、各時代の生活状況を伝えるために多くの写真が用いられ、執筆者によるフィールドワークに基づいた記述やライフストーリーなども盛り込まれており、過去に例のない網羅的な上海史概説書として位置づけることができるだろう。

次に各章の内容について紹介したい。

I章「上海モダンと民衆生活(一九二一―三七年)」の時代は、イギリス、アメリカ、フランスなどから多様な文化が流入

して、文化的にも繁栄した時期である。本章では、企業家やホワイトカラー、知識人が闊歩した表社会と、苦力や労働者、青幫(秘密結社)が暗躍した裏社会によって形成された、混沌とした表裏一体の上海が描かれる。また近年増加しているこの時代の文化史研究も豊富に紹介されており、それら先行研究のレビューとしても非常に役に立つ。

II章「戦時・戦後の都市生活(一九三七―一九四九年)」は、日中戦争の時代である。日中戦争と上海がどのようににかかわっていたのか、またその中から生まれた「抗日」や「愛国」、「対日協力」など

さまざまな立場や価値観が、上海人にとのよう影響したのが描かれる。また上海からの日本人の引揚げについても言及されており、日本に帰った人と上海に留まった人の人間模様も描かれているのは興味深い。

III章「中国革命の夢と現実(一九四九―六六年)」は、建国の時代にスポットがあてられる。共産党政権による新国家建設と体制転換のなかで、上海の社会や文化はどのように変化したのか。労働者の生活全般にわたる互助組織「単位」が組織され、苦力、廃品回収業者、洗濯人、掃除人など都市下層民の生活が充実しは

じめる一方で、知識分子と呼ばれた高学歴の青年や地主、富農などをめぐる階級闘争が激化していく時代を描く。

Ⅳ章「文化大革命の混乱（一九六六～七八年）」は、文化大革命の時代である。反右派闘争、大躍進から続く階級闘争は激しさを増し、学生組織や革命造反派で構成される紅衛兵は革命の急先鋒として運動を展開する。商工業が盛んな上海では、労働者たちによって生産部署が放棄され、生産活動がストップする。鉄道、道路、港湾も停滞し、上海市委員会も造反派によって奪取される。都市機能が麻痺して文字通り生活が停滞してしまう上海のリアルな危機的状況が記述される。

Ⅴ章「改革」と「開放」の胎動（一九七八年～九二年）の時代は、文化大革命が終わって改革開放路線へ大きく体制は転換したものの、上海の都市生活はすっかり停滞してしまっていた。上海の製造業は国营企業が多かったため、国家の政策転換に大きな影響を受けたのである。「改革」と「開放」のはざまの時代にお

いて、下放青年の名譽回復、雇用や教育、住宅問題などが山積した閉塞感漂う一九八〇年代の上海を描く。

Ⅵ章「高度成長期の都市生活（一九九二～二〇一〇年）」は、最近二〇年の出来事である。社会主義的市場経済の導入と国营企業の改革によって急成長を遂げた上海では、中間層が増加して大衆消費が延びていった。一方で富裕層と低所得者層の格差が急速に拡大して社会問題となっている。さらに、学歴社会と教育、出稼ぎ労働者と医療、高齢者と介護、若者の結婚事情など、グローバル化にともなう世界共通の悩みも抱えはじめている。早すぎる変化のスピードにうまく対応できる人とそうでない人の現状を記述する。

Ⅶ章「ライフヒストリーから見ると上海と日本」では、上海と日本のつながりについて記述される。ここでは二つの物語が紹介される。一つは、一九六八年「訪中学生友好参観団」に参加した日本人からみた上海および中国人との交流、もう

一つは、執筆者の一人である朱珉氏とその家族からみた日本および日本人との交流の歴史である。日本人から見た中国、中国人から見た日本という二つのライフヒストリーから、両者の視点が交差する上海の地政学的意義について考える。

以上のように、苦力、対日協力者、知識青年、紅衛兵、都市中間層、農民工、高齢者、若者など、本書によって浮き彫りにされたのは、めまぐるしい体制転換のなかで辛い生活を強いられながらも、たくましく生きるマジナルな人々であった。こうした人々の存在は時間とともに忘れられてしまうが、それでも注意深く都市を見つめると、彼らの痕跡はしっかりと刻まれていることを本書は教えてくれる。三四五―七頁の地図は、都市に刻まれたそうした人々の記憶を示している。

最後に、本書のなかで評者が疑問に思った点、気になった点について述べたい。一つ目は、本書は上海の文化・社会をさまざまな生活者の視点から描かれて

いるにもかかわらず、生活者と密接に関係するはずの「教育」や「宗教」というトピックが不足ないしは欠落している点である。

上海には、日本をはじめとする帝国側が設立した学校も多く、寺社仏閣も多数建立されていた。外国とのつながりが強かった上海において、外国からもたらされた近代教育や宗教は大きな影響を及ぼしたことだろう。生活者の側から上海史を概観する本書ならば、帝国側の学校や宗教とかわつた中国人をめぐる研究も射程に入るかもしれない。本書の持つ魅力的な視点から考えると、さまざまな面白い議論が期待できるため、教育や宗教が多く取り上げられなかったことは、いささか残念である。

たとえば、本書で魅力的な景観として描かれた「南市」(V章、一九一—一九四頁)は、オールド上海の生活がいまだに実践されている場所としてだけでなく、上海の教育史・宗教史においても重要な場所であった。南市とは、上海の旧市街でま

だ開発が進んでいないエリアで、地下鉄9号線「小南門」駅周辺の住宅地である。南市は評者も好きな場所のひとつで上海に行くたびに訪れているが、本書では、迷路のように入り組んだ南市で展開する旧来の生活スタイルが活き活きと描写されている。いまだに桶や盥を使用するトイレ事情や、雑貨屋や飲食店が猥雑に立ち並ぶ景観描写からは、独特な生活臭が漂ってくるようだ。このような人々の活気ある生活風景は、中国の魅力の一つである。ただ、南市も再開発の波にさらされており、近い将来には高層ビル街に変化するかもしれない。

同時に南市は、「農政全書」などを著した明末の学者・徐光啓の出生地であり、豫園や文廟に隣接していることから、古くから教育・文化の中心地であった。そして、徐光啓の影響もあり、南市は上海で最も早い時期にカトリック系の教会が設置された、宗教的な場所でもあるのだ。その面影は今でも各所に残っている。たとえば、一八六〇年米国長老会が

中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 9月号

人民中国雑誌社 定価 400 円 (税込)
[年間購読料 4800 円 (税込)]

【特集】ユーラシア大陸の架け橋となる新疆◆
2014 青島世界園芸博覧会◆魅力的な茶の海 芳醇な茶の葉——貴州湄潭県のお茶の故郷を訪ねて【連載】世界遺産めぐり 地球による大

傑作 丹霞の美、江郎山◆中国共産党はなぜできるのか? ⑧八千万人党员をどう管理(一)◆中国——日本友好の絆⑧ ちば◆科学的発展観とその成果(中) 民生改善にも絶えず努力◆@China わたしと中国 蘇州で「あいさつ運動」◆ぶらり旅 大自然と共生するトン族の村 ほか

『人民中国』は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の情報を満載。見本誌贈呈。 03 (3937) 0300 (東方書店) 二〇一〇年一月号より『人民中国』デジタル版をPDF形式で販売しています。サンプル版の試し読み(無料)もできます。

<http://www.fujisan.co.jp/magazine/1385>

創設した清心中学堂は現在の南市中学として、また、一八六一年清心中学の付属として設立された清心女塾は、現在の第八中学として往時の姿を留めている。このように南市は、旧来の中国の生活スタイルと、西欧由来の教育・宗教文化が重層的に折り重なっている場所である。

二つ目は、「コロナアル・ツーリズム」に関する記述である（Ⅵ章、二二五―二二八頁）。本書で言及されているように、外灘、新天地、田子坊、M50、1933老場坊などは、上海を代表する観光地であり、租界時代の建物がリノベーションされたエリアである。本書では、イギリス、フランス、アメリカ、日本などによるコロナアル建築は、観光資源として再利用され連日多くの観光客でにぎわっていることは指摘されるものの、現代上海における歴史的景観の形成と表象をめぐる問題系から掘り下げられることはない。戦前から引き継いだこれらの建物群は、帝国列強による占領の歴史を物語るよりもむしろ、そうした歴史的な記憶は

脱色され、モダンでレトロなイメージが表象されており、さらにはこうした再開発は産官学が一体となって進められている。現在の上海では、歴史と経済と政治が一体となつて新しい歴史的価値が生み出されようとしているのである。

こうした動きは上海以外でも見ることができる。たとえば、日本の大陸進出の拠点であつた大連には、権力の中核たる満鉄本社やヤマトホテルがあつたが、これらは今でも鉄道会社本社やホテルとして利用され、観光客の耳目を集めている。そして上海と同様に占領の記憶よりも、モダンな都市・大連を象徴する観光資源として表象される傾向にある。上海や大連の事例から、だれがどのように建物を価値づけ、都市の歴史を継承・創造していくのか、その過程ではどのような出来事が起きているのかという問いを想起することができようであろう。

いづれにしても、本書を通して上海の重層的な歴史を再確認することができるし、そこに生きた人々の息吹を感じるこ

とができる。本書は、歴史と現代が交錯する上海の魅力を十分に感じることができる一冊である。

（さとうりょう 立命館大学）

モンゴル・シベリアを歩く

——鳥居・江上の大大陸探検

日本・モンゴル外交関係樹立四〇周年を記念企画。一九世紀末から大陸調査に携わった鳥居龍蔵、一九三〇年代からの江上波夫の調査を中心に、その収集資料や調査時の写真等を通して、騎馬遊牧民と狩猟民が活躍した地域の諸文化と、そこに向けられた日本人のまなざしを見る。

▼横浜ユーラシア館＝横浜市中区日本大通12（☎045-663-2424）みなとみらい線日本大通り駅3番出口▼会期＝7月28日（土）～9月23日（日）9時半～17時（入館は16時半まで）＊月曜休館（月曜日が祝日の場合は次の平日）

▼入館料＝一般三〇〇円、小・中学生一五〇円